



MOBILE SUIT
RGM-79Q

GM QUEL

TITANS MASS PRODUCTIVE
MOBILE SUIT



協力：ホビージャパン



地球連邦軍特殊部隊(ティターンズ)
制圧用モビルスーツ
RGM-79Q「ジム・クゥエル」
1/100スケール マスターグレードモデル

RGM-79Q GM QUEL

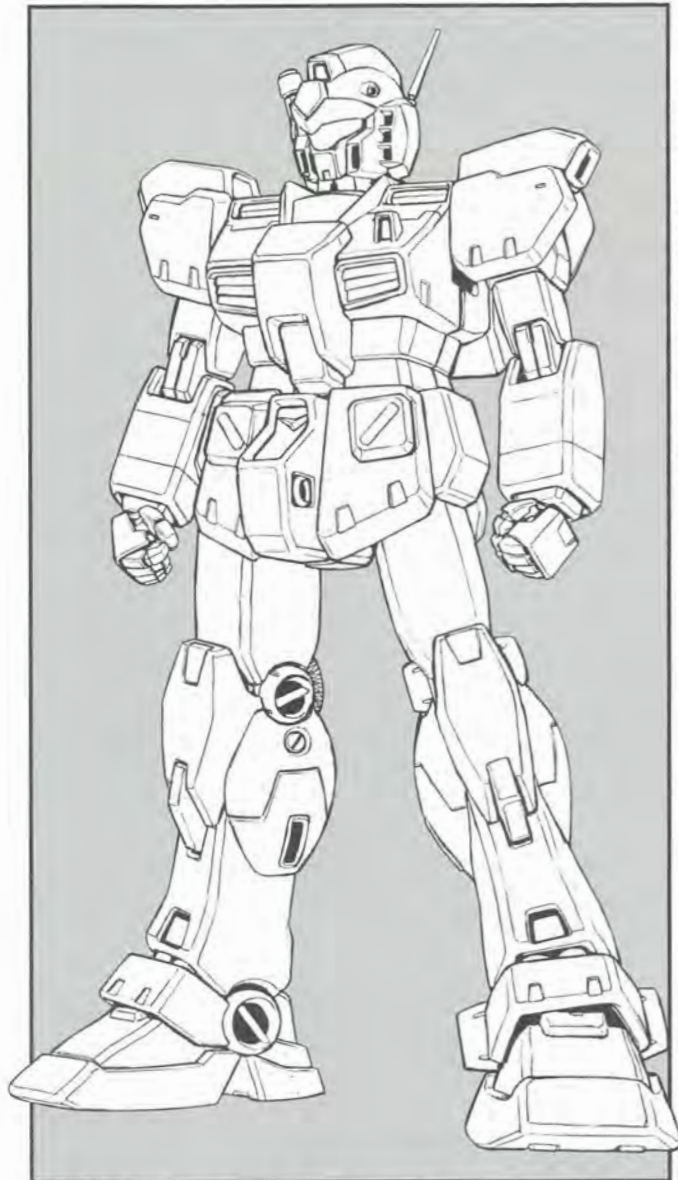
TITANS MASS PRODUCTIVE MOBILE SUIT



地球連邦軍特殊部隊(ティターンズ)
制圧用モビルスーツ
RGM-79Q「ジム・クゥエル」
1/100スケール マスターグレードモデル

BANDAI 1999 MADE IN JAPAN





RGM-79Q GM QUEL

U.C.0083年12月04日。ジャミトフ・ハイマン准将の提唱により、公国軍の残党狩りなどを主任務とする特殊任務部隊「ティターンズ」が結成された。この部隊は、先般の「デラーズ紛争」によって看過できない脅威であることが明らかとなった「公国軍残党」に対する専門の遊撃部隊としての機能を期待されていたため、通常の連邦軍の指揮系統からは独立した部隊として組織された。加えて、この組織はただの遊撃部隊というには不似合いなほど潤沢な運営資金を設立当初から得ていたことも、その期待の大きさを物語っている。

実際には、この組織の提唱から設立までの迅速さの陰には、何らかの政治的な裏取り引きがあったとされている。ジャミトフが元々連邦政府の財務担当の高級官僚出身だったこともあってか、その予算枠も連邦軍本体の整備計画や組織運営経費とは異なる事務手続きを経ていたと言われ、ただでさえ透明度の低い軍事予算の一部を、その予算を立案する側の事務方が恣意的に割譲したとしても、監査院がそれを指摘することはできなかったと言われている。また、その設立自体、連邦軍があらゆる手段を総動員して『ガンダム開発計画』の隠蔽を画策していた時期と重なっていた。つまり、あらゆる手段で「支出」のマネーロンドリングが行われていたのである。

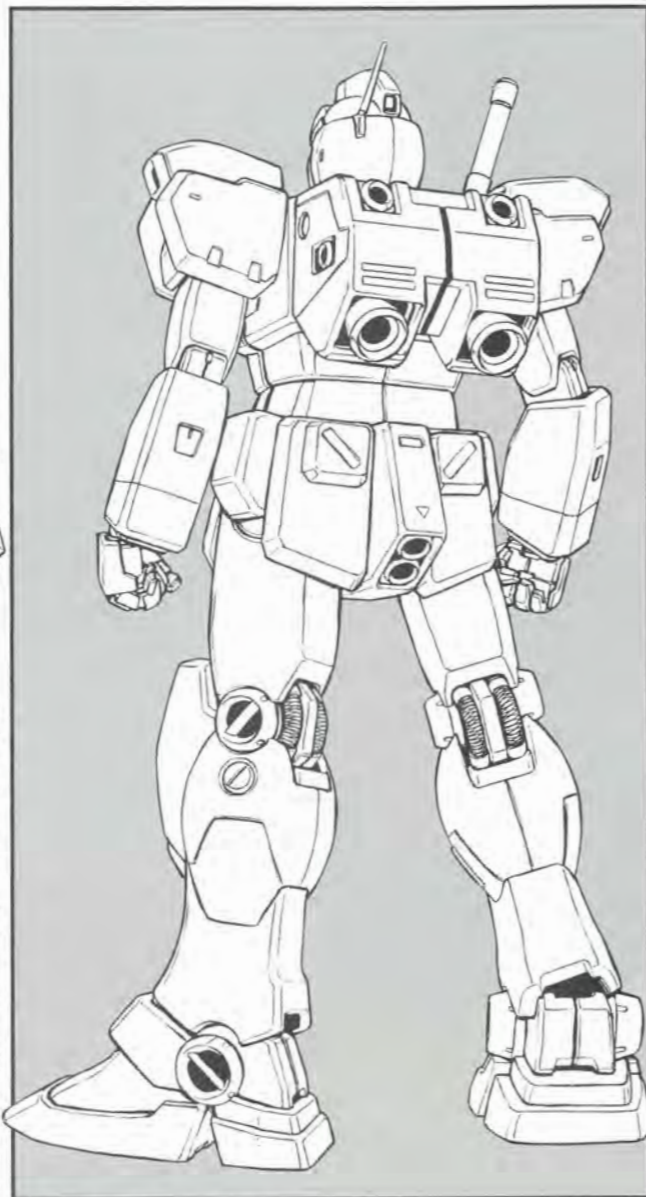
ただでさえ機密扱いの予算枠の配分など、軍閥の思惑でどうにでもなってしまう性格のものなのかも知れない。実際、連邦軍による防衛白書で、「ガンダム開発計画」などは、どこにも見あたらず、その予算のほとんどは「ティター

ズ設立の準備資金」及び「コロニー落着事故に関連する緊急出動」などとして計上されていたのである。

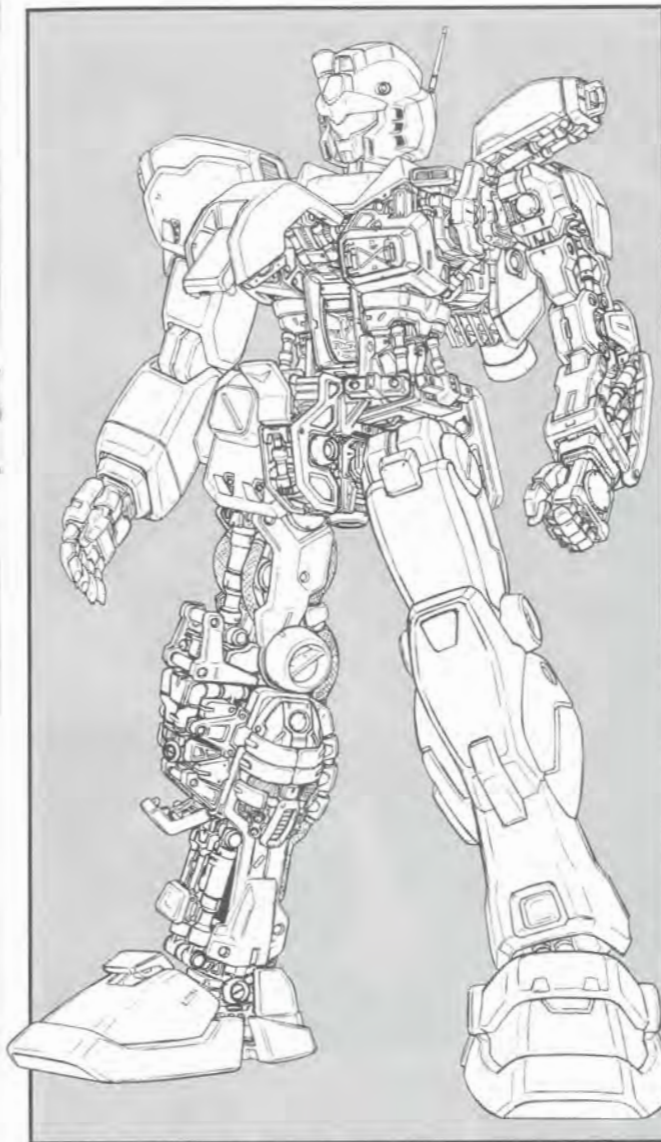
「デラーズ紛争」に関わる機密事項や事件の真相は公式記録から抹消され、計画そのものも放棄された。そして、この計画によって開発された関連技術も、そのほとんどが軍事機密として封印されてしまい、ある時点まで転用も援用も不可能となった。ところが、一定のクリアランスで、その恩恵に浴する組織があった。それがティターンズであると言われている。

『ガンダム開発計画』の挫折は、連邦軍内部に対して秘密兵器開発の民間委託という方針に危機管理や情報統制上の問題点があることを露呈してしまった。ジャミトフは、一年戦争後の軍事的優位はMSの高性能化によるのみ達成されるとして、地球主導の兵器開発の必要性を議会に承認させ、開発における権限を得た。無論、これは公然と承認されたものではなかったが、これより後、他の部隊に配備されたMSのほとんどが戦時に開発された機体の改装機だったの比べ、ティターンズに配備されたMSの多くが新鋭機であるという状況を見れば一目瞭然だろう。また、ジャミトフの唱える「地球至上主義」は、地球出身の技官の意欲を大いに高めた側面もあり、優秀なスタッフを募集させる要因のひとつもなっている。

ジャミトフは「地球至上主義者」であり、ティターンズという組織自体が生粋の地球出身者のみによって構成されていた。これは軍内におけるある種のセクトとして機能し、戦後からティターンズ設立までに至る期間に開発された機体は、試作機も含め、そのほとんどが何らかの形でティターンズのもとに収集され、性能評価が行われた後、組織のフラッグシップとなる高性能機が選定された。その機体こそ、RGM-79Qジム・クウェルである。



Conceptual illustration : Hajime-Katoki



BEFORE ARMAMENT

RGM-79Qジム・クウェルは、ティターンズの設立とほぼ同時に配備された。この機体は、元々U.N.T (Under Normal Tactical=非通常戦術) カテゴリーで開発されていた機体が原型であり、俗にオーガスタ系と呼ばれる「ガンダム4号機」バリエーションのひとつ「アレックス」を原器とする機体群に属する。デラーズ紛争の渦中でも、その「オーガスタ系」の機体は実戦に参加しており、RGM-79Nジム・カスタムは、その内のひとつである。ジム・クウェルは、開発と配備の時期から、ほぼその直系に当たる機体であると言えることもできるだろう。

無論、これらの機体の建造が実際に連邦軍オーガスタ基地のみで行われた訳ではないが、事実、「アレックス」自体「ガンダム」の量産化を指標とした設計を施されていたのである。そのせいか、「オーガスタ系」の機体は部品調達や生産コストの面においてのみならず、戦後の兵器調達の一時期において特筆すべき存在となっている。

その反面、アレックスの開発が「戦時」の計画に基づいていたため、「オーガスタ系」MS群の存在を指して、戦後に生じた「不良在庫」を処分するための方便であるとする説もある。これはある意味正しく、ある意味で間違っている。アレックスは一年戦争時における「最も後発の機体」であったため、「ガンダム」の実働データや先行量産型などの生産実態を検証した後に開発されていた。言わば、その時点で最も完成された機体だったのである。

例えば、ビームサーベルのエネルギー供給設備をセンターに配置することによって、左右に2基必要だったデバイスを1基で済ませるなど、随所にコストダウンとメインテナンスに配慮した設計が施されているのである。この構造

自体、2基あるメインジェネレーターのとどちらからでもエネルギー供給が可能なフェイルセーフとなっており、機体の安定稼働を保証する機構なのである。

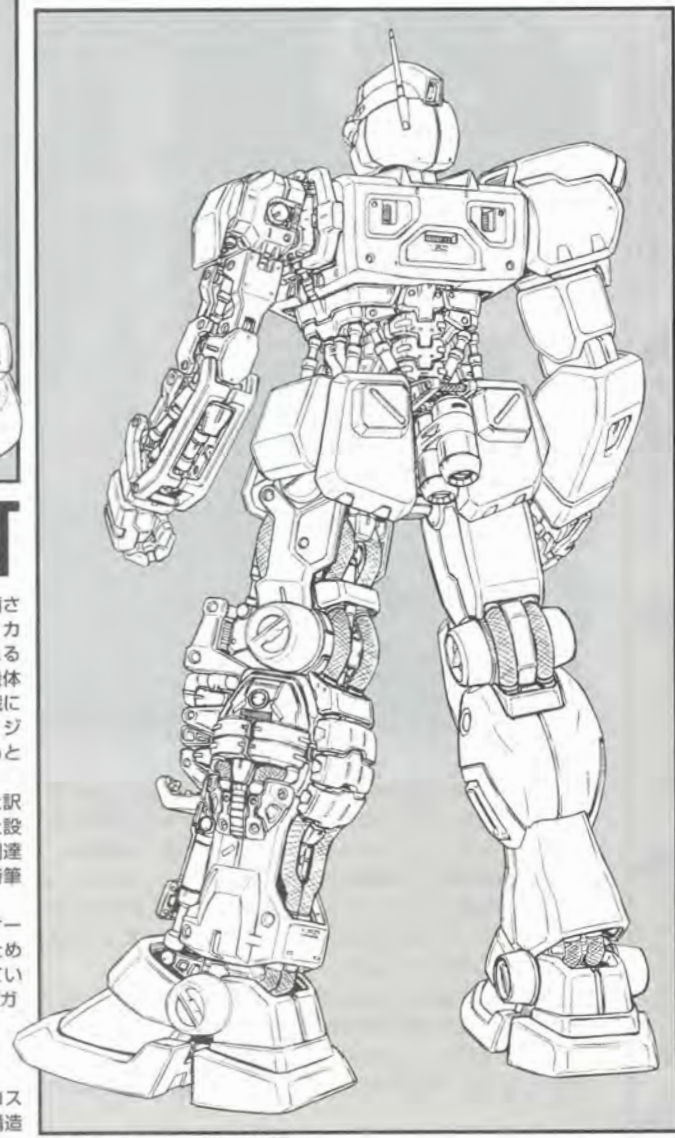
当時、連邦軍本隊は、戦力維持の方策として公国軍から接収した資材や施設を活用し、もっとも効果的かつ合理的な手段で軍備を拡充させていた。ティターンズは、連邦軍にMS用の部品を供給していた企業とも、連邦軍本体とは別枠で契約を交わし、軍の防衛計画とは一線を画した武器調達を実施していたのである。

しかし、公国系の機体の検証が十分に行われた後に指標とすべき「高性能MS」は、おいそれと開発できるものではなかった。また、定期的に自らの政治生命を危くする「ガンダム開発計画」の成果を自ら抱え込む訳にも行かなかった。さらに言えば、ジャミトフのプライドとして、公国系の技術者を多数擁するアナハイム・エレクトロニクスに依存した主力兵器と、その開発体系を持つことはできないという側面もあったようだ。これらの事情を鑑みれば、RGM-79Qが、ティターンズ設立の時点でもっとも優れた「純連邦製」の機体であったと言えることになるのである。

かくして、RGM-79Qは「ジム・クウェル」という名を与えられた。クウェル (Quell) には「反乱などを鎮圧する、あるいは疑念などを抑えこむ」という意味がある。また、その機種名の表記に隠された意味として、ジム・クウェルとは「QUEL=Qualified and Use of Earthly Low=地球の法と権限を行使するGM」という説もある。

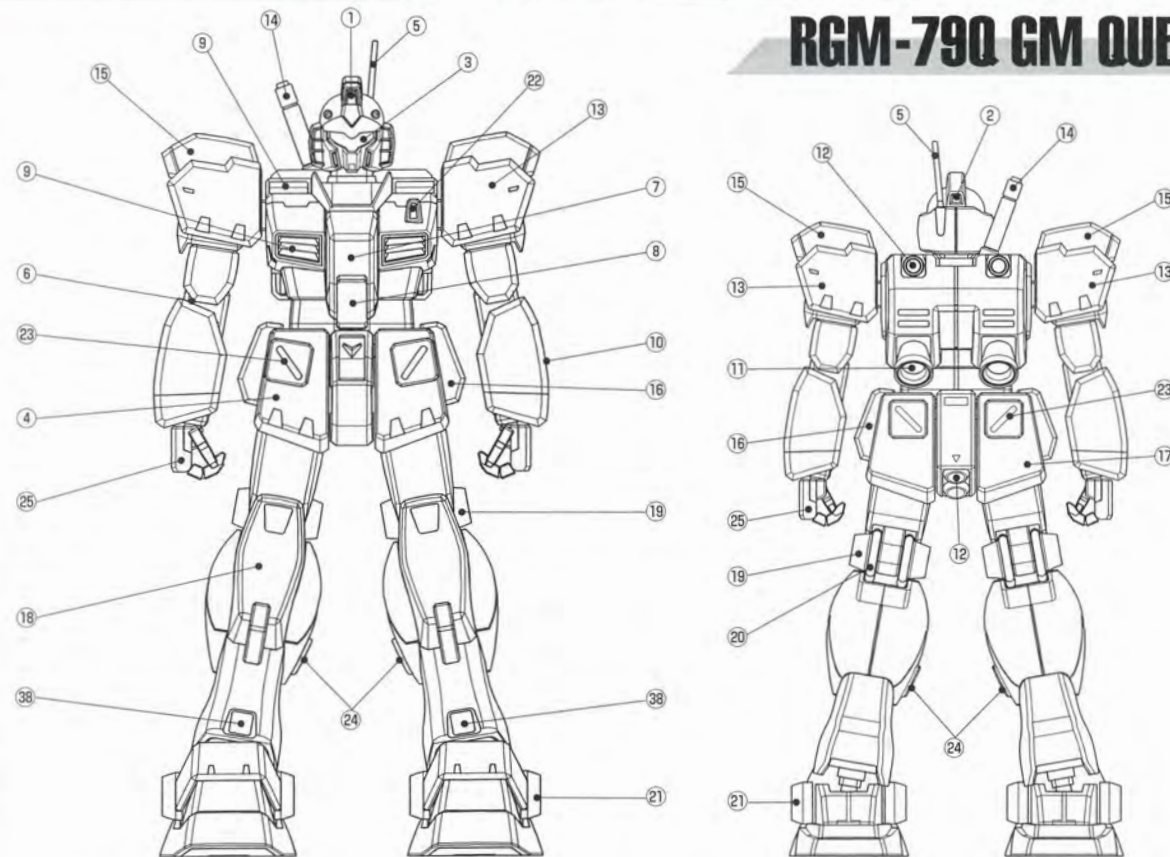
ともあれ、純地球産の技術を結集して開発されたジム・クウェルは、その機体色をして「ティターンズカラー」と言わしめる衝撃を宇宙世紀にもたらすことになる。

そして、その後もティターンズは、戦中から戦後にかけてジャブローを中心にMS開発のために稼働していた部署と、それらに従事していた人員をほとんどそのまま抱え込む形で組織ごと継承し、実質的な「ガンダム」後継機の開発を推進させるのである。



Mechanism illustration : BEE-CRAFT

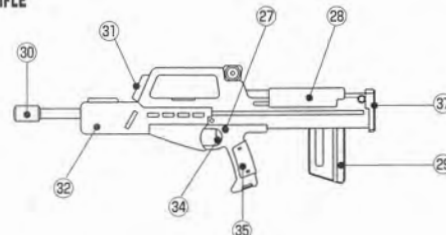
RGM-79Q GM QUEL



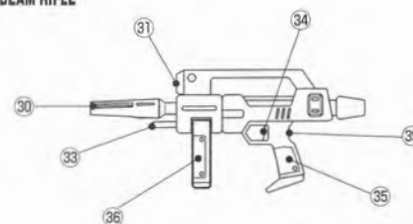
- | | | | | |
|------------------|--------------|----------------|-----------|------------------|
| ①メインカメラ | ⑨インターク/ダクト | ⑰リアアーマー | ⑳マニピュレーター | ㉓ナローレンジセンサー |
| ②リアカメラ/センサー | ⑩シールドマウントラッチ | ⑱ニアアーマー | ㉔スイッチ | ㉔トリガー |
| ③サブセンサーアレイ | ⑪メインスラスタ | ⑲ニアジョイントアーマー | ㉕マガジンキャッチ | ㉕グリップ |
| ④フロントアーマー | ⑫サブスラスタ | ⑳エネルギーサプライケーブル | ㉖パッド | ㉖フォアグリップ |
| ⑤マルチロッドアンテナ | ⑬ショルダーアーマー | ㉑アングルジョイントアーマー | ㉗マガジン | ㉗ショルダーストック |
| ⑥インターナルジョイントシステム | ⑭ビームサーベル | ㉒サブセンサー | ㉘マズル | ㉘マルチセンサー |
| ⑦コクピットアッパーハッチ | ⑮ショルダースラスタ | ㉓コンバーターシステム | ㉙サイトセンサー | ㉙セーフティラッチ |
| ⑧コクピットボトムハッチ | ⑯サイドアーマー | ㉔サポートスラスタ | ㉚ハンドガード | ㉚アンチビームコーティングエリア |

注) この機体は連邦軍のMS適性配備開発計画によって開発されていたものだが、ティターンズ設立に伴って計画が変更され、U.C.0083年12月、艦装中のアレ・ギザに搬入、配備された。

GM RIFLE



BEAM RIFLE



SHIELD



BEAM SABER



宇宙世紀
U.C.0083年12月04日。ジオン公国軍の残党狩りを主任務とする特殊部隊ティターンズが結成された。連邦軍の財務担当高官であったジャミトフ・ハイマン准将を総帥とするこの組織は、地球至上主義を掲げ、連邦軍という権力体制の中に、もうひとつ別の権力基盤を創り上げた。そして、スペースノイド排斥の急先鋒であるバスク・オム大佐を組織の総指揮官に据え、エリート集団として急速に台頭していった。

ジム・クゥエルは、設立間もないティターンズの象徴として、先陣を切って暴徒の鎮圧や施設攻略に活躍した。配備された数は決して多くはなかったものの、特徴的なフォルムと威圧感のあるカラーリングは、見るものに圧倒的な存在感を植えつけていった。

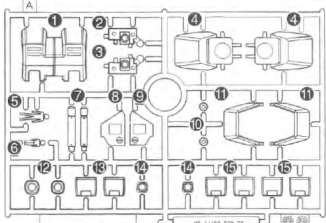
そして0085年07月31日。「30パンチ事件」が発生する。その日、サイド1の30パンチにおいて、大規模な反地球連邦政府運動の集会が開催されていた。それに伴い、各地でデモやサボタージュが散発したため、対応に苦慮した連邦の駐留軍は、大規模な暴動に発展することを恐れ、ティターンズに暴徒の鎮圧を要請した。

要請を受けたティターンズは、一切の警告も通知もなく、コロニー内部に毒ガスを注入し、30パンチの全市民300万人を虐殺した。この事件は報道管制を受け、真相が公表されることはなかった。これによってティターンズの発言力は一挙に増大したが、その一方で、バラバラに反地球連邦政府運動を行っていた組織を急速に結束させることになるのだった……。

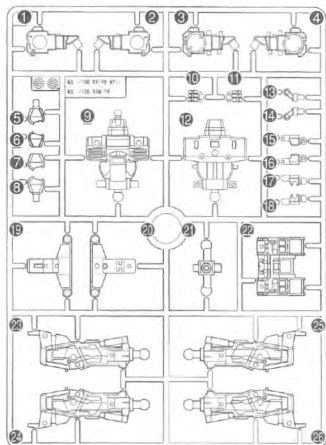
パーツリスト

[使用材質] <成形品>(スチロール樹脂:PS)、(ポリエチレン:PE)、<ポリキャップ>(ポリエチレン:PE)

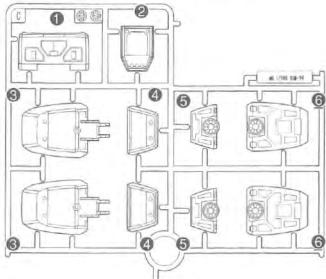
Aパーツ ※⑫は使いません。



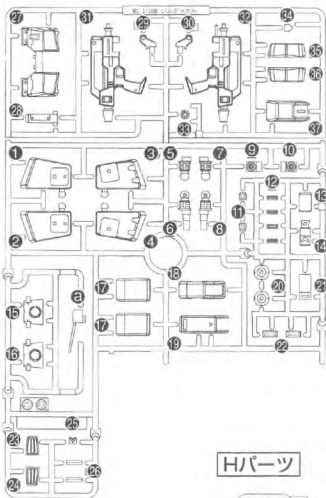
Bパーツ ※⑥~⑧・⑩・⑪は使いません。



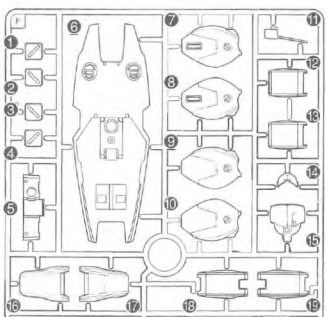
Cパーツ ※⑫は使いません。



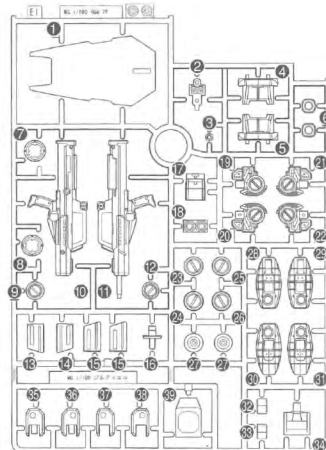
Dパーツ ※①・②・③は使いません。



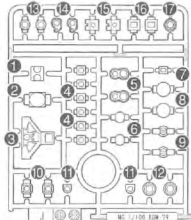
Fパーツ



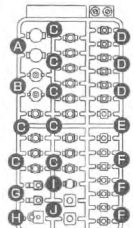
E1パーツ



Jパーツ ※⑤・⑥は使いません。



PC-116



サーベル1パーツ
(SB1パーツ)



マニピュレーター1パーツ
(MP1パーツ)



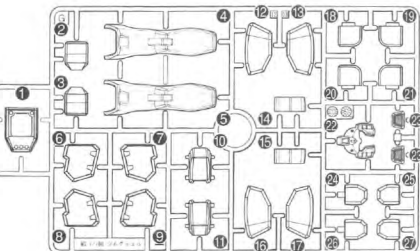
Y3パーツ



※ P.C.C 9個、P.C.D 2個
は予備です。
P.C.G、J は使いません。

カラーシール………1枚
マーキングシール……1枚
ガンダムデカール……1枚

Gパーツ



Hパーツ



注意

お買い上げのお客様へ 必ずお読みください。

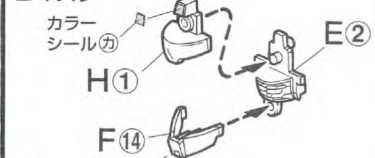
- 本商品の対象年齢は15才以上です。対象年齢未満のお子様には絶対に与えないでください。
- 小さな部品がありますので、小さなお子様が悪く飲み込まないように注意してください。窒息などの危険があります。
- ビニール袋を頭からかぶったり、顔を覆ったりしないでください。窒息する恐れがあります。
- 尖った部分や鋭い部分がありますので、取り扱いや保管場所に注意してください。思わぬケガをする恐れがあります。

組み立てる時の注意

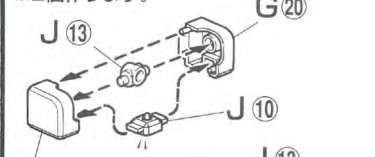
- 組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
- 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。切り取った後のクズは捨ててください。
- 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
- 塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
- 尖った先端や薄い縁端部に触れながらの組み立てには十分ご注意ください。

※サーベル1パーツとマニピュレーター1パーツの記号については、説明書の中ではそれぞれSB1とMP1と表示しています。

■マスク



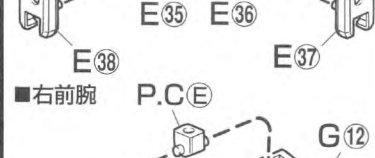
■肩・基部
※2個作ります。



■ヒジ関節
※2個作ります。



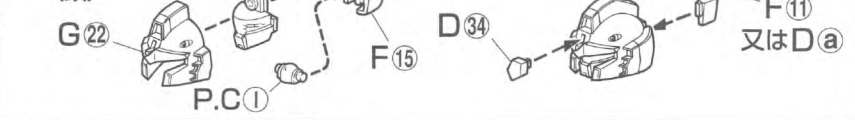
■右前腕



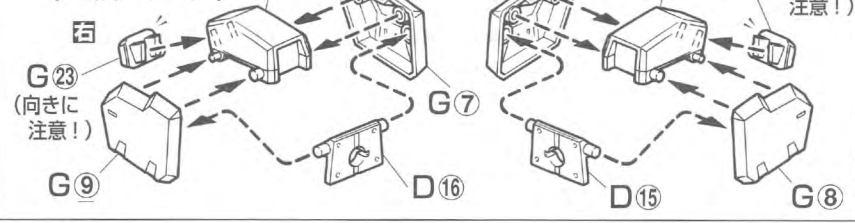
■左前腕



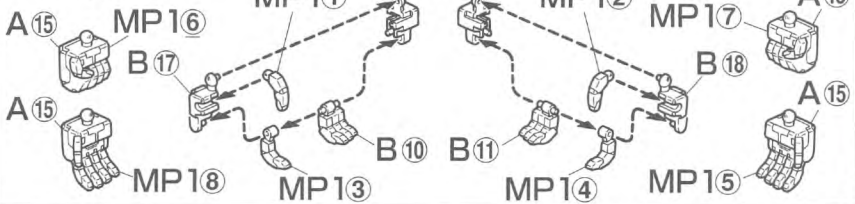
1 Head <頭>



2 Shoulder Armor <ショルダーアーマー>



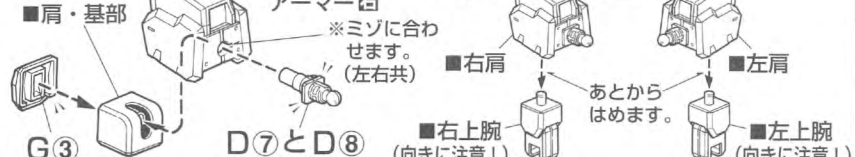
3 Manipulator <手>



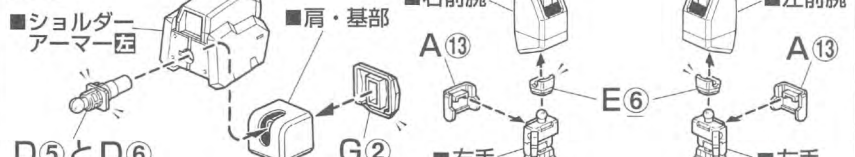
4 Arm <腕>



■右肩
■肩・基部



■左肩
■ショルダーアーマー





AGAINST A RIOT

宇宙世紀0084年4月30日。月面のエアース市近郊の中堅企業ハンガー工業の劣使交渉が争議に発展し、軍警が乗り出す規模の事件に発展してしまった。ハンガー工業はコロニー公社の下請け業者で、業績悪化に伴う大規模なレイオフが騒動の発端であった。その原因が、連邦政府によるコロニー修繕計画の変更によるものであるとして、元社員を名乗る男がMSを持ち出したのである。その騒動に乗り、ジオン残党を名乗るゲリラが現場に参集し、人質を取って工場に立てこもった。そこに、折からジム・クウェルの慣熟訓練を行っていたティターンズの小隊が駆けつけ、5分ほどでMS3機とジュニアMS5機からなる十数名の武装ゲリラを沈黙させてしまったのである。この事件は、ティターンズ設立早々の快挙であるとして歓迎された一方で、同年6月17日の連邦議会における“地球圏の現状維持決定”の要因になったとも言われている。



MARKING



WEAPONS



◀ 機体各部をリアルに再現するナンバー表記、注意書き等のマーキングシールをセット。形式番号等のマーキングを要望の高いガンダムデカールで再現しました。

FOUNDATION OF TITANS

宇宙世紀0083年12月8日。公国軍残党狩り組織として設立されたティターンズは、設立当初から、連邦軍の慣例を無視するかのような“地球出身の人員のみによる組織構成”の認可などを経て、独自に新設計のMSを開発する権限まで手に入れていた。さらにジャミトフは、連邦軍の旗艦を上回る規模で建造されていたアレキザの運用権まで手に入れていた。この艦は、過日、嵐化したパーミングムの後継艦として、同艦をはるかに上回るMSの積載、運用能力を持つ強力な艦艇であった。そして、ティターンズの設立とほぼ同時に専用艦として配備された“ジム・クウェル”は、当時最新鋭の高性能機であり、宇宙の間ごとく漆黒に染まったその機体は、ティターンズが手入れた“力”の本質を何より雄弁に物語っていた。それでもその威容は、テラース紛争の渦中に入った人々にとって、充分に期待を抱かせるものであったことも事実である。



TITANS COLOR

宇宙世紀0086年5月。およそ半年前の“30/1ンチ事件”を契機として、より一層の権勢を獲得したティターンズは、9ヶ月前に竣工したばかりのグリプスに連邦の技術士官を多数召集し、新たなMS開発に乗り出していた。そして同年12月。既存のMSとは全く異なる機構“ムーバブル・フレーム”を有する画期的な機体、RX-178ガンダムMk-IIがロールアウトした。この機体は、ジム・クウェルと同じ“ティターンズカラー”に塗装され、連日にわたりトライアルが行われていた。そして、ジム・クウェルなどをアグレッサーとして、圧倒的な運動性を発揮していた。しかし、その途上で様々な問題点も明らかになっていった。技術的には数カ月で旧式化するだろうと予測する技術者もあった。しかし、この機体と機体色が持つ意味は、全く別のところにあった。“黒いガンダム”の出現によって、宇宙世紀は再び戦乱に巻き込まれようとしていた……。

Engineer nina

ニナ・パーブルトンを1/20スケールのフィギュア(人形)で再現。



PAINTING

※よりリアルに仕上げたい場合は、下の基本色をご覧ください。
※塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。

- 頭・手・足などの塗装色。
ネビーブルー(80%) + コバルトブルー(25%) + ブラック(10%) + レッド(5%)
- 胸・腰などの塗装色。
ミディアムブルー(50%) + コバルトブルー(30%) + グレー(15%) + レッド(5%)
- 関節・内部フレームなどの塗装色。
ミディアムブルー(30%) + コバルトブルー(30%) + レッド(30%) + ホワイト(10%)
- エアインテークなどの塗装色。
オレンジイエロー(60%) + イエロー(40%)
- 各パーニア内側などの塗装色。
モンザレッド(100%)
- センサーの塗装色。
シルバーの上に、蛍光グリーン(100%)
- 武器などの塗装色。
ミディアムブルー(50%) + グレー(45%) + レッド(5%)



REAR VIEW



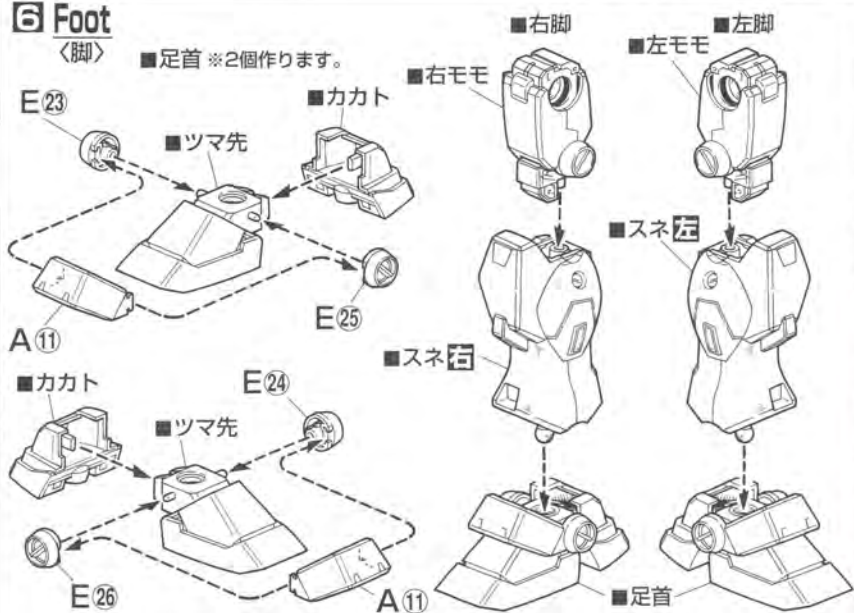
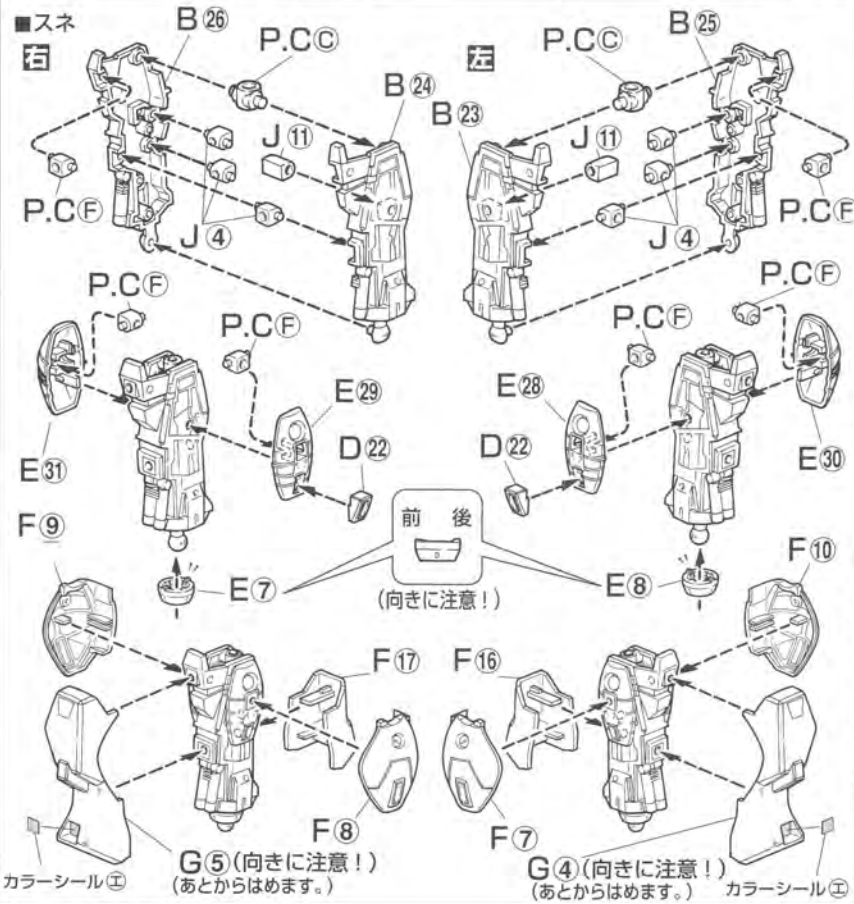
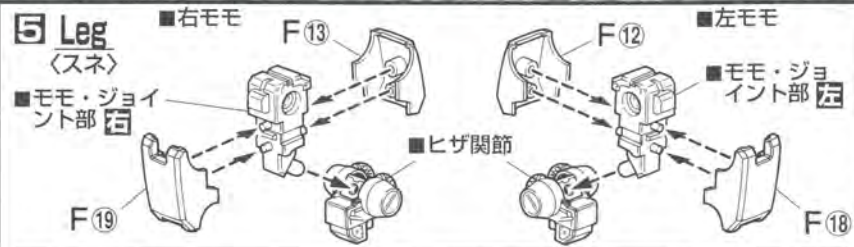
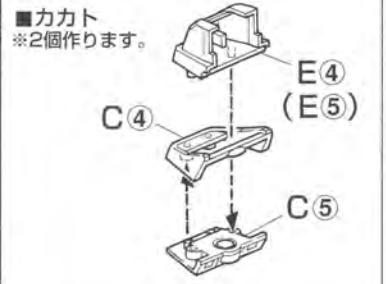
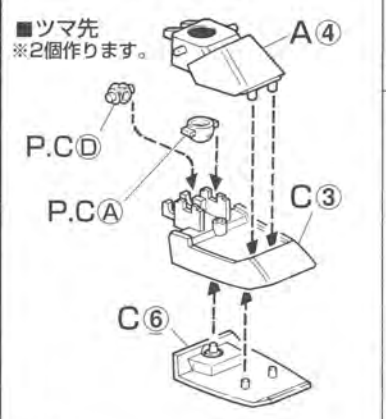
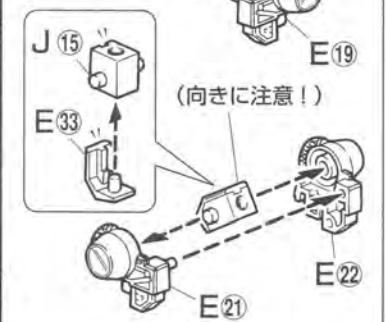
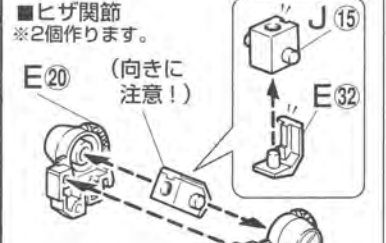
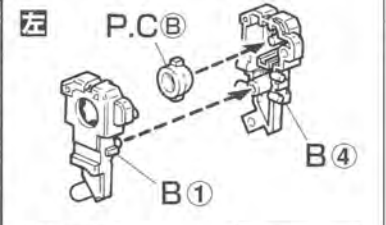
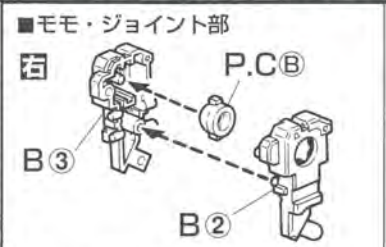
FRONT VIEW



◀ 開閉式のコックピットハッチをはじめシートやパイロットを再現。
▶ 背部バックパック内部のメカニックやパーニア等、細部ディテールを表現。



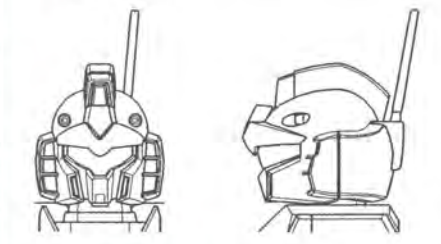
◀ 脚部の装甲は、脱着可能。内部メカニックをリアルに再現。



HEAD UNIT

HU-0079N11 Serial005

RGM-79Qの頭部の構造は基本的にRGM-79Nジム・カスタムと同等だが、下方視界やサーモグラフ及び動態センサーなどのレンジが拡大されており、より“コロニー内戦闘”に配慮したデバイスに換装されている。



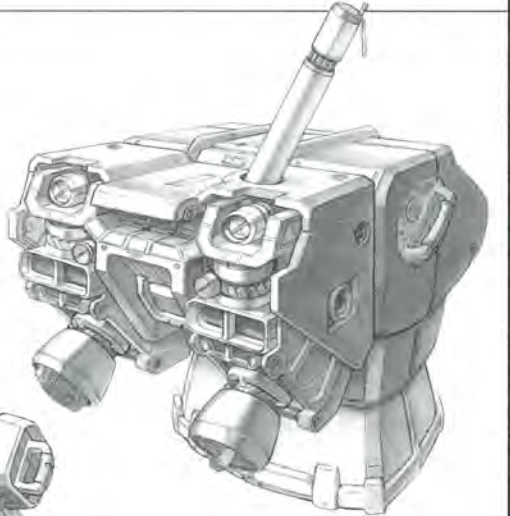
RGM-79Qに搭載される光学端末は、RGM-79Nジム・カスタムとほぼ同じものだが、基本性能が向上しているほか、広義の“対人センサー”など、公安任務にも対応可能な副次的な機能が追加されている。加えて、それまでに稼働していた工廠の中でも品質の安定している部署を選定し、さらに歩留まりのよいデバイスを選び、さらに組み立てられている。また、ガンダムタイプに匹敵するコ・プロセッサーフレームを組み込むことで、センサーの解析能力や処理速度を向上させている。さらに、側頭部に装備されるロッドアンテナは試作機並の受信能力を持っており、機体のモニタリングはもとより、一説には遠隔操作さえ可能だったという説もある。



BODY UNIT

RGM-79Qのコクピットは、80年代前半に供給された既存の機体と基本的にほぼ同等の物である。内装なども79N型とほとんど同じだが、狙撃任務にも対応可能なように、照準装備に若干の改装が施されている。

RGM-79Qの胸部構造は、対戦末期に開発された二層構造の複合インテーク/ダクトを持っている。この構造は、俗に“オーガスタ系”に分類される量産型に多く採用されているもので、メインジェネレーターの稼働効率と安定稼働を保證するシステムである。特に79Qは、その原型となった機体の構造をほぼそのまま踏襲していると言われる。その上、腹部には通常のコクピットを装備しているため構造に余裕があり、スラスター推力や最大戦闘速度の限界時間が向上及び延長されている。

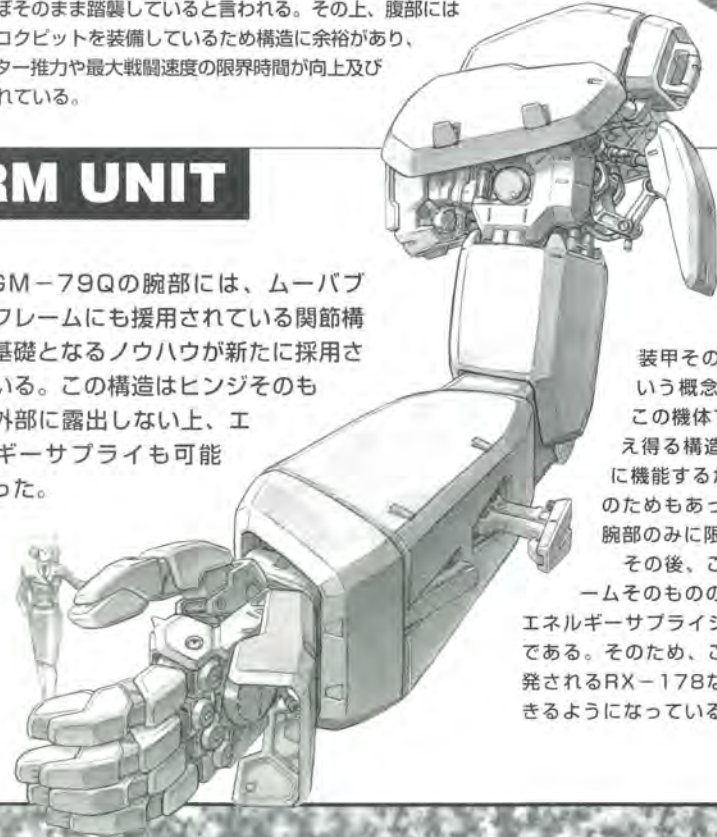


ARM UNIT

RGM-79Qの腕部には、ムーバブル・フレームにも採用されている関節構造の基礎となるノウハウが新たに採用されている。この構造はヒンジそのものが外部に露出しない上、エネルギーサプライも可能であった。

RGM-79Qに限らず、MSの生産性やメンテナンスを改善する方策は恒常的な課題となっていた。その解決法として、装甲そのものと可動部分の構造を完全に分離するという概念が発想され、それが初めて採用されたのがこの機体である。シミュレーションでは充分実用に堪え得る構造であるという結果が出ていたものの、完全に機能するかどうかは実戦投入で検証するしかない。そのためあって、この構造は比較的重重や負荷が少ない腕部だけに限定して採用されているのである。

その後、この構造は後に開発されるムーバブル・フレームそのものの原型となり、付随するオプションラッチやエネルギーサプライシステムなどの規格そのものの基本となるのである。そのため、この機体腕部のオプションラッチは、後に開発されるRX-178などの装備をほぼそのまま装着することができるようになっているのである。



■コクピットハッチ・アーム
 D29 J7 D30

■コクピットハッチ
 D13 D37

■パーニア
 ※2個作ります。
 J12 E27 D20

■バックパック・メカ部
 A2 J3 A3 B22

■センターアーマー
 D18 D14 D25

■フロントアーマー
 右 左
 F4 D4 D3 F3

■リアアーマー
 右 左
 D2 D1

■腰基部
 P.C.D J2 B19

■センターアーマー
 B20 B21 P.C.D
 (向きに注意！)

7 Body
 〈ボディ〉

P.C.C B12 J8
 A6 E17 D36 D35
 ■コクピットハッチ・アーム
 D23 (反対側：D24)

G15 G14 E39 G1
 D27 カラーシール① D26 (両側)

■コクピットハッチ

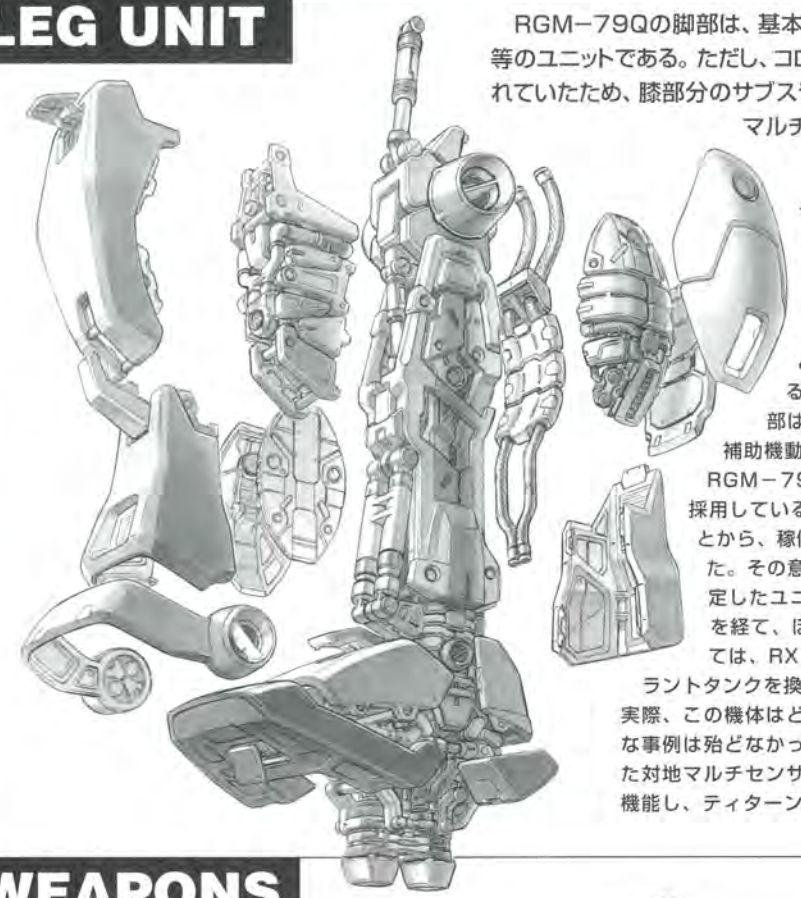
8 Back Pack
 〈バックパック〉

■ボディ F5 A9
 ■バックパック・メカ部
 A14 (向きに注意！)
 ■パーニア
 ■バックパック・メカ部 A1

9 Waist
 〈腰〉

■腰基部
 ■リアアーマー 右
 ■フロントアーマー 右 D9
 ■リアアーマー 左
 ■フロントアーマー 左
 P.C.H D10 J1 D19
 ■センターアーマー
 E18 (向きに注意！)
 ※先に取り付けます。

LEG UNIT



RGM-79Qの脚部は、基本的にRGM-79Nジム・カスタムと同等のユニットである。ただし、コロニー内戦闘の他“対人”運用も想定されていたため、膝部分のサブスラスタはオミットされ、脛部分下方にマルチセンサーが装備されている。

MSの脚部は、どのような運用を想定しているにせよ、最も重要なユニットであることに変わりはない。空間戦闘においては多少事情は異なるが、MSという機動兵器は基本的に“巨大な人型”であることが最重要なファクターである。そのことによる汎用性がMSの最大の特徴でもある。実際、一部の例外を除いて、MSの脚部は無重量空間においても重要な部位であり、補助機動装置としても優秀なユニットであった。

RGM-79Qは、腕部には画期的な構造を試験的に採用しているものの、実働部隊の主力兵器でもあった。その意味で79Nの基本設計は、信頼性が高く安定したユニットであったため、多少の機能付加などを経て、ほぼそのまま採用されている。任務によっては、RX-78NT-1のように、脚部に大型プロペラントタンクを換装して高機動戦闘に対応することも可能。実際、この機体はどのような局面でも稼働に支障が出るような事例は殆どなかったらしく、特に、前面に新たに採用された対地マルチセンサーは、対人制圧戦などにおいても有効に機能し、ティターンズの任務の完遂に貢献した。

WEAPONS

HFW-GR・MR82-90mm
 BAUVA・BR-S-85-C2
 XB-G-1065H
 RGM・M-Sh-ABT/S-00195

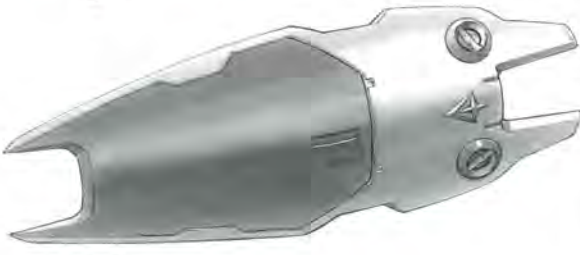


GM RIFLE
 90mmの実体弾を射出する武装。弾体はケースレスで排莖機構がないため、高速で飛び散る空薬莖などで市街地や群衆に余分な損害を与えることがない。宇宙空間での銃撃戦などにおいても余分なモーメントが発生しないため使い勝手が良く、80年代初期に多用された。

BEAM RIFLE
 ビームスプレーガンの生産ラインを転用して生産されたビームライフル。規格的にはローエンドだが、フォアグリップの追加などによって使い勝手が向上し、稼働時間や出力なども改善されたため、後の機体の標準兵装となっている。



BEAM SABER
 80年代になって本格的に普及したセンター配置のベースユニットの規格に対応したビームサーベル。口径は既存のものと同じだが、エネルギーCAPシステムでもミニチュレーターを介してのエネルギー供給でも稼働が可能なデュアルサブライドバイスが採用されている。



SHIELD
 耐弾性や耐ビーム機能よりも運動エネルギーの減免や実体弾を跳弾させるための形状研究から開発されたシールド。一年戦争末期に基本設計が完成し、以後、改良を重ねている。表面には耐ビーム処理が施されているほか、ジムライフルの30連マガジンを2つ装備可能。

ENGINEER

NINA PURPLETON [ニナ・パーフルトン]

アナハイム・エレクトロニクスのシステムエンジニアで、月面都市フォン・ブラウン出身の生粋のルナリアン。[ガンダム開発計画]において、GPO1 (Fb含む) およびGPO2Aのシステムソフトを担当する。入社早々、MSの稼働用ソフトウェアを支援する汎用プログラムを構築。その基本アーキテクチャーは、機体はジムでも操作感覚はガンダムに匹敵するかのようマルチタスクを可能とし、その実績を買われてガンダム開発計画に参画することになった。このプログラムはムーバブル・フレームが主流となるまでの期間、MSの機能拡張に不可欠なものとなり、当然、ジム・クウエルのプロセッサにもインストールされている。



■シールド・本体

F6
E12
(反対側：E9)
(向きに注意！)
J17
P.C.C
E1

10 Weapons
 〈武器〉

■GMライフル
 カラーシール⑥
 E10とE11
 E3
 E13とE14
 E16
 E34
 E15 (両側)

■ビームライフル
 D31
 D28 (向きに注意！)
 D32
 カラーシール⑦
 D33
 ※D33は、図の向きに取り付けます。

■シールド・本体

■ビームサーベル
 ※2個作ります。

A10
 A7

■本体
 ■ビームサーベル
 ■頭部
 ■ボディ
 ■腰部

11 Final Construction-1
 〈完成-1〉

■右腕
 ■本体
 ■左腕
 ■右脚
 ■左脚
 SB1①
 ※2本あります。
 ■ビームサーベル
 D17 (両側)

※A5、Y3①は好きな場所に飾ってください。

12 Final Construction-2
 〈完成-2〉

■GMライフル
 ■ビームライフル
 ■シールド
 ※グリップは下にさげます。

※各武器を手に持たせる時は指が可動する手首に替えてください。

Seal
 〈シール〉

ガンダムデカールのほりかた。
 下の図を見て、ガンダムデカールやシールのほり位置を確認してください。

- 転写するマークを大きめに切ります。
- 転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
- シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすりずります。

ガンダムデカールA
 ガンダムデカールE
 ガンダムデカールD
 マーキングシール②
 ガンダムデカール0~9の組合せ
 マーキングシール④
 マーキングシール⑤ (反対側も同様)
 足内側 (ふくらはぎ)
 マーキングシール⑧
 マーキングシール⑨
 マーキングシール⑩
 ガンダムデカールA
 マーキングシール⑥
 マーキングシール⑦
 マーキングシール⑪

※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。